

進取の精神による実践的人間力の教養教育

神 田 嘉 延〔鹿児島大学稲盛アカデミー特任教授〕

Culture Education of a Practical Human Being by The Enterprise

KANDA Yoshinobu〔Professor, Kagoshima University, Inamori Academy〕

キーワード：実践的人間力、稲盛アカデミーの教養教育、経営教育と人間力、人間力と徳育教育、
稲盛アカデミーのカリキュラムの構造

目 次

はじめに

- (1) 労働をとおしての実践的人間力—分業化の疎外から共生社会へ—
- (2) 実践的人間力と科学の大衆性
- (3) 実践的人間力と幸福
- (4) 現代社会の欲望の歪みと実践的人間力—共生の集団力・社会力のリーダーシップ—
- (5) 実践的人間力としての有徳の大学の役割

ま と め

はじめに

本論は、2009年度から稲盛アカデミーが全学的な共通教育における教養教育を位置づけるために、書いたものである。稲盛アカデミーは、2009年度の学生の受講生が45科目で3207名（前期2162名、後期1045名）を数えている。初年度の開講では、予想以上の受講生である。受講実績は、本論の最後に資料としてのでせているので参考にしてほしい。当初は、稲盛アカデミーの科目提供を受託してもらった全学の教員と非常勤の教員に、その主旨を理解してもらうために、本論の骨子の内容を配布した。そこでは、実践的人間力を学ぶためと、稲盛アカデミーの教養科目提供を位置づけたが、鹿児島大学憲章として、進取の精神の理念が出されたので、再度、その理念のなかで実践的人間力を位置深めた。稲盛アカデミーは、創設精神で、人間教育と経営教育を重ねながら、地域に根ざして、国際貢献できる教育目標をわかりやすく明確にするために図式化した。そして、その中核に人間力をおいたのである。

創設の精神で、人間教育を重視したのは、日本の経済大国化のなかで、倫理観や道徳観の欠如が企業の相次ぐ不祥事ということで明らかになったためである。また、国民的な社会生活が混乱し、さらに、青少年の無気力、残忍な非行、自殺の増大という現実社会の問題状況が出ているからである。その問題に立脚し、それを克服し、あたらしい友愛社会を築くために、倫理と道徳と結びついた実践的人間力を学ぶことを強調したのである。稲盛アカデミーの経営教育は、この問題意識を基盤にしたものである。また、経営教育は、労働の教育と結びついたものである。

鹿児島大学は、大学憲章で「我が国の変革と近代化の過程で活躍した先人の意志を受け継ぎ、自らが困難な課題に果敢に挑戦する「進取の精神」を有する人材を育成し、地域とともに社会の発展に貢献する知の拠点」としての学風の確立をうたっている。そして、中期目標・中期計画では「鹿児島大学は、幅広い教養の厚みに裏打ちされた倫理観と生涯学習力を備え「進取の精神」を有する人材を育成するた

め、学士課程の基盤となる共通項育の改善を図るとともに、専門教育の質を保証するシステムを確立」と、進取の精神の人材育成のための教養教育を重視しているのである。

我が国の変革と近代化の活躍した先人の進取の精神とはなにか。戦後の鹿兒島大学創設の系譜になった鹿兒島高等農林、第7高等学校、鹿兒島師範学校、明治初期の高木顕寛などを輩出した鹿兒島医学校、戦後の困難の条件のなかでつくった県立大学工学部・医学部の建学精神、また、藩校の系譜をもつ造士館や郷中教育なども含めて、鹿兒島で培われた進取の精神をどう現代のなかで評価して積極的に生かすか。現代の地域の抱える様々な課題、人類史的な諸矛盾の探究から問題解決の展望に対して、実践的に挑戦する大学教育をめざす一端を稲盛アカデミーは率先して担うものである。

稲盛アカデミーは、この進取の精神による実践的人間力をめざした人材育成をするものである。進取の精神による人間力形成教育の授業科目は、鹿兒島の文化のなかで培ってきた進取の精神を現代的に再評価し、実践的人間力の人材育成をめざすものである。

鹿兒島で培った進取の精神を再評価するうえで、日本の近代化の過程で活躍した鹿兒島大学の歴史的系譜から先人の業績を評価し、この業績を深く研究し、その思想や倫理観を現代的視点から学生とともに考えていくものである。このための授業科目として、日本の知行合一の思想、商人・経営者の倫理・思想、日本的経営哲学、幕末郷中教育思想などを考える授業科目を提供した。さらに、進取の精神で、鹿兒島大学を卒業した人材や鹿兒島県にゆかりのある人材、鹿兒島をはじめ南九州の優れた地域人材を大切にしながら人間力を学ぶ共通教育を展開するものである。

現代における進取の精神とは、国際的、人類史の視点から、人間性と実践的倫理観をもった人間力が求められているのである。温故知新のごとき、古いこと、歴史や伝統をよく学び、研究して、新しい知恵が生まれてくるものである。

困難のなかでチャレンジしていく進取の精神は、強い信念と勇気が求められるが、その基盤に科学的な知識と科学的な探求心、問題解決能力、生涯にわたって学習できる知の拠点と密接に結びついて展開されていくものである。

稲盛アカデミーの授業は社会人に開かれた教養教育として、社会人と青年学生がともに学ぶ公開授業の形態を基本的にとっている。この公開授業は鹿兒島大学の生涯学習教育研究センターと協同しているものである。稲盛アカデミーの教育目的に賛同する鹿兒島大学の全学からの協力教員を組織して進取の精神による実践的人間力の共通教育科目を提供していくものである。稲盛アカデミーは、鹿兒島大学の全学の共同教育と共同の研究機関なのである。

稲盛アカデミーでは、平成21年4月から鹿兒島大学の全学共通の選択必修科目として、45科目提供することになった。これは、全学的な協力教員と専任教員による協働の成果である。稲盛アカデミーの特徴ある学生教育は、進取の精神により、人間らしく生きていくための実践的人間力を学ぶことをめざしている。

まさに、人間力を正面から様々な分野からアプローチしていくものである。進取の精神による実践的人間力形成の教育は、現代的な非人間化している状況のなかで、人間の本性を基礎にして、人間復権、人間になるための学びである。ここでの実践的人間力を学ぶということは、教養教育の仕事である。

稲盛アカデミーのめざす進取の精神による実践的人間力は、働く能力、経営能力の基礎的な考え方である。それらは、人間らしく生きる力を基礎にしたものである。働く力は、すぐに役に立つ職業技術教育という狭い意味だけではなく、人間らしく生きていくための職業観形成を目的とするものである。キャリアデザインという職業紹介からの職業選択教育のみを意図するものではない。人間が生きていくうえでの仕事の意味を本質的に理解しようとするものである。

従って、仕事の意味を、生き甲斐、人間としての社会的役割、社会的責任を問うものである。企業の経営者や各界の社会的リーダーを招聘して講義を展開しているのも、実践的人間力として働き方、生き方を考えてもらうためである。とくに、地域に根ざした大学として、地域リーダー的視点を大切にしている。稲盛アカデミーとして、これらの内容を授業科目として重点的に提供した。

現代は、機械化、管理化、孤立からのコミュニケーション能力、共生と連帯への力、持続可能な地域社会づくりの人間力、様々な問題に対する解決能力が求められている。人間らしく文化性をもって、社会のなかで共に幸福観や生き甲斐をもって生きていく力が必要である。そして、そこでは、分業化による孤立からの社会性、協調性、統一性を持てる力が決定的重要性をもつ。従って、実践的人間力の大学教育は、分業化された専門主義ではなく、教養教育のなかでの人間らしく生きるための実践力をめざすものである。

学校教育法での大学教育の目的は、「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする」というように、学術の府としての専門的教育ばかりではなく、広く知識を授けることの教養教育と、さらに道徳的能力や応用的能力を目的としているのである。

大学において、専門主義から教員の業績評価が行われ、教員の配置も専門主義の視点から採用が行われていくが、専門主義からの教養性の力量や道徳的、応用的能力をどう評価していくのかという教員の採用・昇任の研究課題があるのである。幼稚園教諭から高等学校までは、教員免許によって、教員資格の基準が定められている。大学の教員資格は免許主義ではない。

大学の教員は、教授会によって、採用・昇任していくしくみである。教授・准教授の資格は、大学設置基準で次のように定められている。「博士の学位を有し、研究上の業績を有する」ものを「大学における教育を担当するにふさわしい教育上の能力を有する」。教授・准教授の資格は、優れた研究業績が前提にされているのである。この規定が、専門主義のみになりやすく、広く深い専門的学芸、道徳的、応用的能力を有するということになりにくい側面をもっているが、本論では、教養教育という課題を掲げて実践的人間力を学ぶ意義を明らかにするものである。

新しい時代における教養教育のあり方を答申した中央教育審議会の答申は、5つの教養の課題を提起する。

第1は、「社会とのかかわりの中で自己を位置付け、律していく力、向上心や志を持って生き、より良い新しい時代の創造に向かって行動する力として、新しい社会の創造に向かって行動する力」をあげている。

第2は、「我が国の伝統や文化、歴史等に対する理解を深めるとともに、異文化やその背景にある宗教を理解する資質・態度」をあげている。それぞれの民族的文化や地域の文化を理解することは、自分たちの生きてきた地域や民族に対する誇りと、同時に文化の多様性や宗教の寛容性を理解していくための教養性である。国際化が進む現代のなかで、異文化のふれあいが強まり、その相互の理解と寛容は、極めて大切な教養課題になっていく。教養を身につけないで、自国の文化や歴史の絶対化であっては決してあってはならない。

第3の教養課題として、「科学技術の著しい発達や情報化の進展に対応し、論理的に対処する能力や、これらのもたらす功罪両面について正確な理解力、判断力」をあげている。科学技術の発達が分業的専門主義のなかで生活や環境全体のなかで効率の側面ばかりしか見ないで長期に循環的に持続可能性や生活や心の豊かさを見失いがちになる。

情報化も利便性のみで、人間のもっている身体的ふれあいの交流や情操の豊かさや、感情のコント

ロール性などが配慮されていない。一方的な功利主義的情報により利己の欲望の自己増幅、攻撃性の防止機能が十分ではない。人間が本来もっている諸能力が、機能低下している。科学技術の発展による一面的知識の修得や情報化による、利便性の利用による問題点があらわれている。ここでは、一面的専門主義による科学技術や情報化ではなく、人間力をもった教養性が強く求められているのである。

第4の課題は「日常生活を営むための言語技術、論理的思考力や表現力の根源、日本人としてのアイデンティ、豊かな情操や感性、すべての知的活動の基礎としての国語の力をあげている」。この課題は、日常生活を営むための言語技術であり、大学の教養教育として国語の力をつけていくためには、社会科学や人文科学の基礎的教養と結びついて展開されるものである。国語の文法が分かれば、教養性をもった作文能力が身につくものではない。

社会評論、文芸評論、芸術評論や、それぞれの分野の論文が書けるようになるためには、言語技術だけでは決してないのである。むしろ、それぞれの分野の探究心を基礎にしての教養性と結びついてこそ、国語の力が身についていくのである。日本に來ている留学生に対する教養教育として、日本語教育は最も大切な課題である。日本を理解してもらうために日本語の習得は不可欠である。

第5の課題として、「礼儀・作法などから型から入り、身体感覚として身につけられる修養的教養」をあげている。礼とは人と人の関係の心であり、型は心の感謝の表現の結果である。型が一人歩きしていくものでは決してないのである。礼儀作法は、人間関係の真心の表現であり、型の強制では心にこもった人間力の教養性ではないのである。礼儀は人間関係に大切な教養性であり、その神髄を教養として、どのように考えていくのか。とくに、大学における礼をどうみていくのか。教師と学生との礼の関係はいかにあるべきか。大学教師自身の教養をもった人間力性が求められているのである。

中央教育審議会は、新しい時代に求められる教養性として、以上のように5つの課題を提起したのである。大学教育にとって、最も大切なことは、奇形化したエリート的専門主義と自己欲望の肥大化を克服していくための教養性が求められている。このためには、科学の大衆化を人々の暮らしと結びつけて、展開していくことである。それは、文化や価値の多様性と寛容性を認め合う民主主義形成のために不可欠なことである。多様性と寛容性は、人間らしく生きていくための教養である。実践的人間力を学ぶ教養とは、人間の尊厳を基礎にした、人間らしく実践的倫理や哲学をもって、生きていく行動能力である。それは、物知りになる、百科事典的な教養では決してない。

中央教育審議会の平成20年12月答申「学士課程教育の構築に向けて」からみれば、幅広い学びと、大学教育にふさわしい国際的に通用する質の確保の保証を強調している。それは、持続可能な社会の発展のために、21世紀型市民にふさわしい学習成果の達成を求めている。

一方で、国際的動向として、前記の中央教育審議会は、技能的なスキルの側面を強調していることも特徴である。「今日の大学教育の改革は、国際的には、学生が修得すべき学習成果を明確にすることにより、「何を教えるか」よりも「何ができるようになるか」に力点がおかれている」。

国際的には、ということで、人材開発を国家の競争力向上の施策としてのアメリカの連邦労働長官諮問委員会のワークプレイス・ノウハウの提示や、イギリスの教育雇用省のナショナル・スキルズ・タスクフォードの調査報告の技能定義の提示、イギリスの高等教育制度検討委員会のデアリング委員会勧告の獲得すべき技能の提示などを参考の事例にあげている。質の確保ということが、スキルということに力点をおくならば、幅の広い教養に裏付けられた文化人形成、識見のある人格形成という意図からの民主主義の発展のための大学の役割という側面からみるならば、大きな問題をもたざるをえない。

「なにができるのか」ということはスキルの側面を含むが、決して、それだけではない。識見をもつことと、それを実際的に工夫し、応用できる知恵が必要なのである。識見や知恵をなくして、スキルの

みに独自に展開し、技術や技能が変化していくならば、使いものにならないものとなり、使い捨てのスキル教育になってしまう。職業的な当面の実利的な職業訓練は、本来的に職場の仕事をとおして教育訓練されていくものである。

大学は、学術の府として、それぞれの分野での基礎的な見識や知恵を磨く教育が求められているのである。なにができるのかという当面の実利的なスキルになれば、大学は、目先の職業訓練機関になってしまい、学術の府としての教育から大きく遊離していくものである。それは、学術の府としての大学の質を低下させていくものである。大学の教育の質を考えていく場合に、当面の実利的にすぐに役にたつという訓練的な質では決してないのである。

中央教育審議会の学士課程教育の構築の答申のなかでも「学問の基本的な知識を獲得するだけでなく、知識の活用能力や創造性、生涯をつうじて学び続ける基礎的な能力」をあげている。知識の活用や創造性、生涯学習のための基礎を強調することはよいが、このことを実現していくうえで、基礎的な知識の獲得、科学の大衆化とうことで、大学において、学術の府としての最新科学の成果をわかりやすく学べる機会が必要なのである。

これは、決して大学としてスキルの教育や知識の活用ということで、軽視されるものではない。スキルの前提に基礎的な知識や科学の大衆化ということで、大学人の専門性や教養性が求められているのである。

中央教育審議会の学士課程教育の構築の答申では、各専攻分野を通じて培う学士力として、4つの分野をあげている。1、知識・理解 2、汎用的技能 3、態度・志向性 4、総合的な学習経験と創造的な思考力と、4つの課題を提起している。この4分野が類型化して、それぞれが個別分野として実施され、とくに汎用的技能を強調するのであれば、学術の府としての大学教育に危惧を感じる。

学校教育法の大学教育の目的は学術の府を強調している。「学術の府として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させる」。大学教育の目的は決してスキル至上目的とするものではない。

大学教育において学術の府としての学問や科学のもつ役割を決して忘れてはならないのである。軍国主義から戦後の民主主義のための教員養成として、学術の府として、大学における教育養成と開放性の原則を重視した。これは、教育における学問や科学を大切にしたいためである。この4分野を要素としてとらえることは否定しないが、4つのどの分野を担うのかという選択論的な見方になることに警戒をする必要はある。

とくに、汎用的技能として、コミュニケーション・スキル、数量的スキル、情報リタラシー、論理的思考力、問題解決能力として技能化されるものではない。論理的思考力や問題解決能力は決してスキルではない。そこには、学問や科学に支えられた能力があることを忘れてはならない。

態度・志向性としては、自己管理能力、リーダーシップ、倫理観、市民としての社会的責任をあげている。それは、学問や科学に支えられた能力を身につけてこそ、効力を発揮できるのである。中央教育審議会の強調する人間の態度・志向性は、人類の優れた思想や哲学、歴史の教訓、人類的な知恵、経済と社会、法と社会などを学問的にみつめることが求められている。

現実の問題を実践的に学問的にみつめてこそ、倫理観や社会的責任を内面化させていくのである。とくに、大学においては真理探究の態度は極めて重要性をもっている。この真理探究の態度は、個々の問題や矛盾を発見し、それを探求し、解決していこうとする学問的態度が必要である。

1998年のユネスコ21世紀の高等教育に関する世界宣言では、高等教育の使命と機能として、第1に教育し、養成し、かつ研究を行う使命として6点をあげている。そのうちで教養教育を進めていくうえで

重要な視点として「世界的視野をもった市民性および積極的な社会参加、内発的な能力構築ならびに正義を背景とした人権、持続可能な発展、民主主義および平和の統合のための教育を行うため、個人の発達および社会的移動のための機会を提供すること」「民主的市民性の基盤を形成する価値に関して青年を訓練し、かつ、戦略的選択肢に関する議論および人間主義的視点の強化に役立つ批判的かつ利害にとらわれない視点を提供することにより、社会的価値の保護および増進を支援すること」をあげている。世界的視野をもった民主的市民の育成は、ユネスコの高等教育世界宣言では重要な課題になっているのである。21世紀における民主的市民の形成は、正義、人権、持続可能な発展、平和と民主主義の課題達成である。その教育は大切な大学の役割であるが、それを達成するためには、人間主義視点にたつて利害にとらわれない社会参加、学生の興味関心や自発性による内発的な能力の構築、個人の発達が求められているのである。

高等教育の使命の第2の課題として、大学の倫理的役割、自治、責任および期待される役割として、6点が提起されている。このなかで教養教育を進めていくうえで重要と思われることは「その諸活動において倫理ならびに科学的小および知的厳密さを行使することを通じ、そのきわめて重要な機能を維持および発展させること」「社会がよく考え、理解しかつ行動する支えとするために必要なある種の知的権威を行使し、完全に独立の立場で、かつ自らの責任を全面的に自覚しながら、倫理的、文化的および社会的問題について発信できること」「社会に対しては全面的な責任および説明義務であると見なされている学問の自治および自由を全面的に享受すること」がうたわれている。

大学の倫理として、社会が理解し、行動の支えになるように、科学的であること、知的厳密性をもつことの重要性を強調しているのである。大学は学術の府であり、その社会的役割を果たすために大学の自治と学問の自由が保障されているのである。

学問の自由には、社会に対して説明責任が前提になっている。学問の自由が一人歩きしているのではなく、社会に対しての説明責任が義務になっている。この意味で大学の教育と研究は、学問の自由ということと同時に、社会的に授業の公開、教科書の出版、研究経過や成果の公開発表が求められているのである。特許などと絡み研究経過や成果が公開原則の大幅な修正がみられているが、この問題についても大学の倫理としての説明責任ということからの国民に納得のいく公開のしかたが求められているのである。また、学問の自由の名のもとに、個々の教員が研究室にお城をつくり、外からの意見を防ぐ城壁によって、自由気ままに、社会性から離れたものであってはならないのである。研究のもつ人類的貢献、社会的貢献、地域的貢献が常に求められているのである。

稲盛アカデミーとして、実践的人間力ということで、実践的という概念を強調したのは、すぐに役にたつという目先の方法的な実利を意味するものでは決してない。稲盛アカデミーとして、実践的人間力を学ぶことを領域的に強調することは、人間が生きていくうえで大切な人間的労働と経営を重視したからである。

稲盛アカデミーとして生き方、実践的倫理・哲学、職業観、人間力経営など人間らしい経営と労働の分野を重点科目にしているのは、この理由からである。人間力を学ぶということは、ユネスコの高等教育世界宣言の精神である21世紀型の教養をもった民主的市民の育成である。

人間力を学ぶということで、21世紀型の市民的教養を大学で強調することは、科学的に、知的厳密性のもとに人類的な文化遺産を継承発展させていくという視野をもつことが必要である。そこでは社会的リーダーや文化人を育成しようとするものである。これらの目的がきちんとされているのかという説明責任は絶えず求められている。この意味からもホームページの利用、研究成果や教育実践の報告などの定期的な刊行物の発行は、極めて重要性をもっているのである。

(1) 労働をとおしての実践的人間力—分業化の疎外から共生社会へ—

稲盛アカデミーは、労働をとおしての実践的人間力の学びを探求していくものである。なぜ、労働の問題を考えていくうえで、人間力なのか。それは、現実の分業化した社会の労働疎外の現実があるからである。職業観の教育や働き方の教育に、経営参加の問題を志向していかねばならない。労働疎外の本質は、労働と経営の分離であり、労働が一斉に分業化されていくことによって、疎外は進んでいった。この認識にたって、働き方として、経営参加の問題が大きな意味をもっているのである。

人間らしく働くための経営能力は、人間力を基礎にしたものである。人間力は、人類史的視野からの現実の社会や地域の暮らしを直視しながら、未来志向的な真理探究能力、仁義礼智信、真善美などの人間性の総合的な形成力であり、知行合一の実践的な創造性をもった諸能力の形成である。そこでは、現実の諸矛盾の克服を人間力を学ぶことをとおして、問題解決への探究能力をつけていくことである。稲盛アカデミーの提供する経営関連科目は、以上のように人間力、徳と結びついているもので、経営学一般ではない。

現代社会は、現実の諸矛盾を克服していくうえで、欲望の絶対化からの克服が大きな課題である。それには、人間としての社会的存在や共に生きていくとう視点が大切である。その視点は、社会的役割を個性からみつめることである。個々における人生の志を基礎として、感覚的の五官による感性的認識を大切に、それが、理性的に発展させていく学習方法が求められている。その理性的認識は、実践的人間力の形成へと結びつくものである。

青年期に、それらの基礎的思考方を身につけていくことは、絶えず仕事と暮らしのなかで自己研鑽していく生涯学習の力に結びついていく。つまり、そこでは、認識だけの自己陶醉、博学的自己顕示への世界ではなく、実践と結びついた人間の目的意識的活動のための人間力の形成が求められているのである。

このことは、青年教育として人間力育成に欠かせないことである。欲望を利他の精神のもとに、共に生きていく力を身につけていく志のなかで、目的意識性をもって、コントロールできる力が、社会的存在の人間力の大切な要素になる。

欲望は個々の実践的活動力の出発点になる。しかし、人間としての社会性を持たない、利他主義をもたない欲望は狂気になる。人間力を学ぶことは、個々の欲望を社会的にコントロールする力が大切なのである。近代社会の個人化は、個性を開花していく歴史的役割を果たしてきた。近代社会の発展による個人の欲望の肥大化は、人間の本質である社会的存在からの連帯が失われていったのである。

近代社会の分業による専門家の養成や弱肉強食の競争主義による立身出世教育は、共に生きていく仁義礼智信の人間性の役割を形骸していったのである。ここには、共同体的社会存在から個々を尊重していく新たな人間的連帯としての協同性が求められているのである。近代史の学問にとって、人間の欲望と社会的連帯の喪失など心の問題の課題もあるのである。

人間力形成の現代的課題は、未来志向的に人類史的視野から、動物的ヒトから氏族共同社会の形成、氏族共同社会の人間の起源をみつめていく必要がある。さらに、文明の発展は、人間の生活を便利にし、自然からの苦汗労働をやわらげていった。

しかし、同時に太陽を中心とした生活や自然循環的生活を乖離していった。また、奴隷制や封建制は人間性を否定していく側面をもった。そして、近代社会の発展による分業化、弱肉強食の競争社会による格差社会の到来などを人類史的に見つめ直すことが求められている。このことによって、現実的な日常生活の社会で、生身の自然に生きる人間的な良知が求められているのである。稲盛アカデミーの学問の提供は、現実を直視しての人類史的視点が大切である。

現代は、所有、経営、労働ということが分離し、個別的労働の分業化や専門化が進むなかで、労働疎外、孤立、雇用不安がもたらされている。そして、現代社会は、精神の貧困化、拝金主義、モラルの低下による社会的退廃化、自己欲望の肥大化と大きな社会的歪みが生まれている。生活の貧困化、環境問題などの社会的矛盾が人々に突きつけられている。大量生産、大量消費という市場にける自由な価格競争が、よりグローバル化している。そこでは、弱肉強食の価格競争のなかで、農業の衰退や中小企業の倒産、また、発展途上国の経済的植民地、先進国の雇用の差別化と不安的就労の増大が起きている。

ここには、地域を基礎としての持続可能な社会をめざす新たな起業おこし、仕事おこし、人間連帯の力が求められている。これらの状況のなかで、新たな経済が求められている。人間にとっての環境の意味、新たな持続可能な社会の形成が求められている。現代は、人間らしく生きていくための商品開発などをつくりあげていくうえで、人間力が期待されているのである。これらを達成するためには、新たな労使関係づくり、国家・行政セクターばかりではなく、市民自治による公共性づくりなども同時に求められ、民間の商品市場の原理ばかりではない、雇用のあり方の創造が必要になっている。稲盛アカデミーの教養の視点は、未来を積極的につくりだしていくという変革の論理をもつての学問提供である。

人間力を学ぶことは、社会的適応能力ばかりではなく、また、効率的な人間の労働力化ではない。それは、創造的な社会づくり、新たな共生と連帯、持続可能な地域社会づくりのための人間復権である。そこでは、人間らしい労働能力、職業選択の自由を保障する生涯学習が強調されなければならない。

現代は、孤立的人間が増大して、精神不安をかかえている人々が増大しているが、この課題を克服する教育は、極めて重要である。自殺は、大きな社会的問題になっている。自殺は、動物として本能である生存の欲求さえも奪われている。人間であるがゆえに、感性的意識をもっているがゆえに、食欲、怒り、愚痴、ねたみをもっているが、共生と集団的働きのなかで、人間的に心を鍛えていくのである。青年期の学びも共生の視点をもって、集団的に学ぶことが求められているのである。

携帯やインターネットの普及による情報化社会は、人間と人間の感覚的、理性的なふれあいの関係をも奪っていく。そこでは、幻想、妄想への社会にはまりこみやすい条件をもつ。便利な情報伝達手段が、ふれあいの人間的な絆である感情をもつての会話を妨げて、孤立に拍車をかけているのである。以上の状況から大学教育として、人間的絆や連帯心を育てるために、集団的学びを意識的につくりあげていくことが、求められているのである。稲盛アカデミーとして職場体験学習、自然学校体験学習、歴史めぐり体験学習をくんだのは、集団的な学びを体験をとおして意識的に行うためである。

根源的な労働との関係で生活が分離することが、不安定就労や失業、ニートの存在をつくりあげる要因になった。そこでは、現代の青年をとりまく仕事の矛盾状況が典型的に現れている。また、そこでは、労働することの人間の価値の社会的評価が侵されている。まさに、働く意識さえ奪われる。これは、人間が主体的活動をしていく本来の意欲、生きる喜びも奪っていく現象であり、その矛盾を直視しながら青年期の働き方、職業観教育を考えていく必要がある。

働き方や職業観教育は、人間が本来にもっている仁愛や慈愛の人格的な力を加味して、総合性への目的意識性の力が必要になっている。そこには、協同の力によって、所有、経営、労働のあらたな統一、個々の労働者の経営への参加、労使関係のあらたな構築の教育が求められているのである。

その教育は、労働のもつ人間復権をとりもどす学習である。そこでは、労働における技能性や芸術、文化性の力をも意味している。さらに、文化をもった人間としての生存的欲望の満足観を充足するために、本来の人間の労働意欲の復権の教育である。所有、経営、労働の分離によって、また、労働の分業化が進むことによって、労働意識は、一部の専門的労働と単純労働に分離し、労働の孤立をも進んでいったのである。労働の孤立は、システム化と管理化のなかで非人間化が一層進み、人間が本来的に

もっている労働の喜び、創造的な営みの喜びが奪われていったのであるが、人間復権の教育を職業観教育が進めていくのである。稲盛アカデミーは、職業観教育として「20才からのハローワーク」として、地域で活躍する社長さんの人生論、生き方の授業をくんだのは、以上の理由からである。

大切な教育課題は、人間的な労働を求める学習であり、分業の独自展開による弱肉強食の競争主義による孤立した労働の適応主義的キャリアデザイン教育ではない。また、利己主義的な自我膨張に溺れての疎外状労働の容認する教育でもない。

それは、共生という論理から社会的役割を担っていく能力、個々の能力や個性を認め合い、それぞれの役割を尊重し、相互の関係を築きあって、共に個性的能力を伸ばして協同的関係をつくりあげていく人間力を意味している教育である。人間的コミュニケーション能力でさえ、言語能力による表現力や接待的能力だけの意志伝達手段を意味しているだけではなく、共に生きていく協同関係を作り上げる文化性をもった人間力を意味していることを忘れてはならない。

ここでは、人間的絆を大切にしていって個々の個性ある人格を認めあって、社会存在としての人間評価を個々に行い、誇りがもてるように関係を取り結ぶ教育である。個々の能力の発展は人間復権という意味から不可欠なことである。この能力を発展していくためには、共に生きていく労働の場の目的意識的設定の教育が大切である。

人間としての共生的な労働の場をとおして、人間的絆の能力形成が求められるが、弱肉強食的な資本主義的市場競争や立身出世の競争、管理主義的労働の適応主義教育では、人間的絆がつくりだされていない。目的意識的な人間的絆の学びの場としての労働の場が重要である。このためには、市場競争、立身出世、管理主義労働から解放された教育を保障していくことが必要であり、国家的・行政的セクターや市民的公共的セクターの支援の位置がそこにあるのである。

企業の社会的貢献として、労働をしながらの人間的育ちの課題がある。学校教育の場ではなく、労働のもっている人間的育ちを保障していく社会的しくみが独自に企業や様々な労働の場にその役割が求められている。

学校教育は、この労働現場を見通しての教育内容の編成が必要である。大学教育において、体験も含めての青年の進路選択のための教育、労働現場への橋渡しのインターシップ教育が投げかけられている。これも、労働の人間的育ちの役割を重視するためである。

職人的な労働能力には、人間のもっているかんや熟練による技能が基本的に要求され、それは、絶えざる修練によって獲得され、そこには、芸術性と文化性が含まれている。職人的労働は、職人としての人格が、つくられた製品そのものに反映されている。人間的な技、巧みの技は、職人的労働のなかにある。労働という視野から人間力を歴史的にみれば、この職人的労働は、大きな要素である。また、中小企業においては、この要素が残る企業をみることができる。

しかし、職人的な労働の場は極めて限られた世界である。職人的世界における人間力を強調することは、現代的な労働や生活に、人間的な生き方を考えていくうえで、大きな意味をもっている。彼らは、豊かさや幸福度を問うことを考えさせる。「技術や文化」の科目は、農業と工業の技術の具体例をとおして、ものづくり教育の重要性を明らかにするために、稲盛アカデミーとして提供したものである。

科学技術の発展は、労働の分業が著しく進み、個々の労働からは、この職人的労働の世界が見えにくい。そして、労働過程において、人間的労働ではなく、高度化した機械の体系に人びとが従属していく。自己の仕事の製品が、製造、販売、消費されていく全体構造のなかで、社会的にみえなくなっている。中小企業においては、経営の全体構造がめみえやすい。

自給自足の生活形態や地域局地的市場圏のなかでは、それらが、身近のなかでみられたことはいうま

でもない。大学の教養教育として、労働のあり方を探求していく課題があるのである。労働を人間の本质から見つめることも必要である。人間は、目的意識性をもっているのが他の動物と根本的に異なる。この目的意識性が、人間的な絆をつくり、仁愛の精神や慈悲の心をつくってきた。

絆をもつという人間の起源は、社会の起源によって形成されたのである。目的意識的に人間は、長い歴史のなかで、共生関係をもって社会的存在として生きてきたのである。群れとしてのヒトから氏族共同社会をつくり、共同して、相互扶助をもって生きるようになったことが人間の起源である。労働は、人間的絆の現れである。

労働をとおして、人間的絆は目的意識性をもつのが特徴である。人間は、ヒトとヒトの関係の発達によって、相互扶助の目的意識をもった社会をつくったのである。人間の生存権の欲望は、相互扶助の目的意識性のなかで、個々の欲望が氏族共同としての生存的欲望に包摂されていくのである。動物的な自然淘汰から人間的相互扶助社会に転嫁していくのである。

労働をとおして、目的意識性をもつことは、動物と異なって、自然に甘んじている生存形態ではない。自然災害など、絆をもって人間的に目的意識によって克服していこうと工夫の努力をするのが人間である。

人間のもっている創造性は、現実の生活を豊かにし、幸福をつくりだしたいという人間的営みが出発であり、この創造性の力は、人間的自立の営みである。科学の発展や智慧の工夫、知識の蓄積、学問の発展は、このようななかで展開してきたのである。決して、適応主義的、絶対的権威秩序に従属し、創造性否定の意識を形成するための学問や知識の蓄積ではない。

ところで、労働における分業の発展によって、自然全体を生活のなかで循環的に総合的にみていくことが低下していくことによって、人間と自然の関係が破壊的に進んでいく。人間自身が自然の一部であり、自然のなかで生活の営みをしていることを見失ってしまうのである。自然と人間との自立の問題を考えていくうえで、人間自身が自然のなかで生きていくことを決して忘れてはならないのである。稲盛アカデミーは、人類史的視野から「エネルギー」「循環と共生の技術」「環境思想」「現代社会と環境教育」「環境汚染」の科目提供を行なった。

また、人間が目的意識性をもつことによって、生存的欲望が権力欲望、人を支配する欲望、侵略欲望、贅沢欲望、立身出世欲望などが生まれていく。欲望の拡大による目的意識性は、文明の発展を促進したが、権力をつくり、侵略戦争を起こした。差別と格差の社会は、奴隷制や封建制をつくった。

人間社会の形成と同時に、自然そのものを神とするトーテミズムやアニミズムの存在は、人間の欲望を生態系のなかで意識させた。生きる自然の掟と人間社会の相互扶助性によってコントロールする力をもつように人びとの心に与えたのである。人間の欲望と目的意識性に、人間として生きるための自然の秩序が要求されたのである。太陽のもつ人類への恩恵、自然秩序のなかでの太陽のもつ意味などアニミズム的自然信仰、習俗のもつ環境保全などが環境保全の共生型社会をつくっていくうえで新たに注目されているのである。人間は古来から欲望を共生的関係によって、コントロールするためのトーテミズム、自然信仰があった。さらに、道徳、人間的修養などの課題を人間になる条件として与えられたのである。人間の労働においても信仰や道徳性の役割が歴史的にあったのである。

人間は労働をとおしての目的意識性をもつことによって、科学や学問が発展してきた。科学の発展が労働の技術になることによって、ものが豊富になった。学問の発展や芸術の発展は、人間的心を豊かにしていった。同時に、人間の感情も情操の発展として、音楽や絵画などの芸術文化をつくりあげてきた。人間は実践的であり、常に目的意識性の力で、主体性をもって、心の生活を豊かにしよと生きてきたのである。同時に人間は、社会的存在として、共生のための道徳性、修養が求められたのである。このこ

とを怠れば目的意識性をもった自己欲望肥大のおそろしい動物になっていくのである。

労働をとおしての実践的人間力は、目的意識性をもった人間である。体験学習は単に汗を流すことではなく、汗を流す目的意識性が求められているのである。この目的意識性は、現代社会における自己欲望の肥大化現象や様々な社会的モラル退廃のなかで、実践的倫理が大切になっているのである。目的意識的な生き方と道徳が不可分に結びついているのである。

(2) 実践的人間力と科学の大衆性

実践的人間力をもって活動的に生きるためには、幅の広い教養性と文化性に裏づけられた専門的能力の形成が必要である。実践的人間力では、専門化された科学・技術を決して否定されているのではない。

実践的人間力を強調することは、専門化された科学技術が、人間らしく利用され、個々の人間の暮らしにとって豊かさや平和をもたらすことを求めているのである。人びとの幸福度を増し、人間らしく生きていくために、科学を学ぶための教養性の強調である。専門化された科学・技術は、環境破壊、大量殺戮兵器に利用され、科学・技術が人々の生活をどん底に落とし入れることがあるからである。

人間の目的意識性を見通しをもって、自らの意欲的な実践的活動をすることである。意欲する実践的活動は、目先だけでの行為ではない。人間は長期的な見通しをもって目的意識的に実践的活動をすることである。長期的な見通しをもつことは、人間の科学的認識、合理的認識の発展の基盤である。国民教育としての科学教育の重要性を実践的に学ぶという視点から「科学教育」「仮説実験授業」の講義科目を稲盛アカデミーとして提供した。

学問をすることは、実践的活動の見通しを確かなものにしていくための人間的智慧の蓄積である。学問をすることによって、人間は自ら考え、合理的に判断して、工夫をこらして、創造的していくものである。

科学的に判断できることは、智慧の蓄積のもとに、見通しをもって実践活動をするためである。人間は感情をもっており、それ抜きでは意欲的な活動はできない。意欲することは人間の特徴であり、そのことによって、工夫や創造的な営みが可能である。科学的判断能力を身につけていくことは、感情や情動のみによって人間が行動しないように理性によってコントロールするように人間の実践を天与から課せられた。

中国、朝鮮半島、ベトナムの歴史では、科挙試験に合格して、官吏になっていく道があった。学問が立身出世のために利用されたのである。そこでは、儒教的な朱子学知識を一生懸命に暗記したのである。日本でも近代以降に公務員試験などに知識が利用されてきた。ここでの知識の取得は、立身出世のための試験合格の手段であった。その試験能力は、秩序や権威への適応能力になる。そこでの知識は、合理的判断、未知への好奇心からの真理探究、創造的活動のための目的にはなっていない。

ところで、学問をすることによって、人間の様々な体験を合理的に認識することができ、見通しての思考基礎になるのである。科学的思考は、合理性をもつての工夫と創造的な実践的活動であり、自ら体験し、思考錯誤しながら、真理の探究の姿勢が基本になる。体験的認識は、科学的法則との関係でみるならば、直接的に見えない世界や錯覚していく世界がある。法則を自ら発見し、確認していく過程は、試行錯誤があるのである。

思考錯誤は、自ら合理的に判断する科学的態度が不可欠である。科学的思考は、現代社会のように、自己の欲望のために人をだますことが多々みられるなかで、デマ宣伝を克服するためであり、生きていくための生活防衛的役割を果たす。

だまされないためにも、デマ宣伝に洗脳されないためにも科学的思考や合理的な判断力が人間力とし

て、必要である。自ら合理的に判断するためには、人間の智恵の蓄積や法則の認知、人間が作りあげてきた文明や学問の吸収、人間の様々な体験情報の認知などが求められる。自ら合理的に判断するうえでの課題は、総合的な視野からの本質をつかむ能力形成が大切である。科学的思考は、法則の探求というばかりではなく、合理的に自分自身で判断できる能力でもある。

ここに、科学の大衆化という概念を人間力の形成として重視する積極性があるのである。従って、それぞれの専門性からの教養的アプローチは、啓蒙主義的な科学の大衆化や専門の基礎の提供、博学主義による物知りになるための教養の提供でも決してない。

人間力を学ぶということでの教養科目の提供は、それぞれの専門性を学生であれば誰でも理解できるようにわかりやすく提供してもらうことはもちろんであるが、同時に、人間の暮らしや幸福度などと結びついて、さらに、実践的に課題を発見して、問題を解決していく探求心や処理能力が求められているのである。

この意味から自然や労働などの体験学習や教師と学生が共に考えていくことや、異文化などに積極的にふれあっていく学びなどが求められているのである。それは、単に科学の大衆的な啓蒙という意味では決してなく、人びとの暮らしを豊かにして、人びとが幸福になっていくための科学の大衆化である。科学の大衆化は、生活と結びつく積極性があるのである。

つまり、科学の大衆化は、科学的探求の設定における大衆の暮らしと、環境問題や平和などの人類的な課題からの科学過程への課題発見があるのである。一方的に大衆は啓蒙の対象ではない。大衆の暮らしから学ぶという科学の過程もあるのである。

科学の課題発見は、個々の未知に対する興味関心、探求心が基本的になれば、個々の能動的な研究的探求は進んでいかないことはいうまでもない。しかしながら、大学において、科学の大衆化をあえて強調するのは、個々の研究課題、研究への探求において、人びとの暮らしの豊かさ、平和、人権、幸福という人間的な関係への結びを強調するためである。

その人間的な関係能力は、それぞれの専門性の能力だけではなく、幅の広い教養性からの文化人としての人間力や人格を伴った人間性の力が求められているのである。人格を伴った人間性の力は、コミュニケーションの世界に大切なことである。パーソナルコンピューターや携帯電話の発達により、人間と人間の関係が肌をとおして、顔のみえる形で、また、仁愛や慈愛の精神という人を思いやる人間的感情をもって結びあうことが少なくなっているなかで大切な課題になっているのである。

人間と人間の接触によるコミュニケーションの能力形成は、細分化された先端技術や高度の分業化された機械、ロボットやコンピューターに置き換えた人間的な能力ではない。ここでは、人間としての人格や人権が否定されていくことに対する人間らしく生きる諸能力の形成という対概念からの人間力の積極的な意味があるのである。

(3) 実践的人間力と幸福

人間力のまえに実践的という概念をつけたのはどういうことかという疑問をもつ人もあろう。人間力ということばが多義的に使われ可能が多い。ここでは、問題設定をはっきりさせていくことが必要である。

この実践的とは、人間の主体的存在、活動的という意味である。自らの暮らしや仕事を変革的のかわりで積極的に働きかけ、人びとの幸福を豊かにしていくことを意味している。したがって、実践的とは、個々の内面のみに終始するのみの修養だけではなく、人間的関係における社会的な修養の働きや社会的に主体的に変革していく活動的な工夫、創造の活動に、人間としての幸福を増大していくことを

意味している。

人間的修養として、人間の本質をみていくのであれば、相手を思いやる利他の精神や、慈愛、そして、分別の役割をもつての仁愛精神獲得のための働きは大切である。まさに、ここでの実践的な意味は、人間的な本質的な働きかけを意味している。従って、実践的とは、学校教育現場でよくみられるハウツウ的な教育実践の目先の実利的な手段のための技術方法の意味では決してない。

なぜ今、実践的人間力を学ぶことを強調するのか。実践的人間力を学ぶことは、現代社会の病理現象から人間らしく生きることが侵されている状況があるからである。その状況を克服して、人々が少しでも幸福になれるようにするためである。実践的人間力を学ぶことは、人間らしく生きるための諸能力の形成であり、決して、国家、地域、企業のための道具としての人間力ではなく、また、学校での心の教育にみられるような「心のノートをつくり子どもの心の状況を教師が把握して指導するという」手段としての人間力教育ではない。

プライバシーなど人間尊厳が大切にされ、人間らしく生きる諸能力を形成することが、実践的人間力を学ぶことである。実践的人間力を学ぶことによって、地域や企業において、楽しく生き甲斐をもって創造的に生きるためのものである。人間尊厳が前提になって、また、人間らしく生きることが目的となって、地域や企業の人間力があるのである。

このことが結果として、地域や企業、さらに、その民族、国家を構成する人びとによって、その民族や国家が社会進歩していくものである。人間的に民族や国家の発展は、幸福の達成を基礎にしている。

個々にとって、真の幸福とはなにか。利己主義的に生きることなのか。自己欲望を肥大化させ、地域、民族、国家のエゴをむきだしにして、絶えることのない争いを繰り返すことでいいのか。幸福とは、社会的な人間的関係における利己主義的な欲望のぶつかりあいではなく、利他精神と慈愛、分別と役割をわきまえた仁愛の精神からの己と他者との関係からの自然的な人間の社会的存在の本質からの幸福達成ということからである。

(4) 現代社会の欲望の歪みと実践的人間力ー共生の集団力・社会力のリーダーシップー

現代社会は欲望の肥大化と市場絶対主義をグローバル化のなかで実現しようとすることで、拝金主義と弱肉強食の競争主義が世界を覆いつくしている。そして、国家や企業、国際的機関の組織が強大化して、人びとを官僚組織のなかに縛りつけている。社会全体が退廃状況のなかで、人びとを管理していくしくみになっている。

現代は、拝金主義、弱肉強食の競争主義、組織の肥大化による官僚主義、社会的退廃の状況のなかで、社会病理現象が著しく進行していることであり、それは、人間尊厳の社会的喪失現象である。現代は、人間そのものよりも機械や金大切にされ、共に生きていくうえで、人間を社会的存在としてみる見方が弱くなっている。

そこでは、扶助や慈愛、仁愛、仲間としての相互関係の人間性よりも専門的な科学・技術を絶対化し、人間のもっている総合的な力や自然との関わり能力、相互に生きていくうえでの生活力、相互の関係力、コミュニケーション力、相互扶助の社会力を軽視する風潮が強くなる。

実践的な人間らしく生きるための諸能力の形成は、個人的な能力のみではなく、社会的な人間力としての諸能力形成が本質であり、それぞれが、相互に絡み合っ、生きていくうえでの基礎的な地域社会や家族、職場での総体としての人間力である。個人的な能力が社会的に生かされていくことは、これらの総体としての実践的な人間力のなかで積極的に発揮されるのである。現代社会の歪みの現状のなかで、人間らしく生きていけるような社会にしていくためのリーダーシップをもてる人間力をつくりあげ

ていくうえで、大学教育の役割は大きい。大学は、社会のリーダーを養成する高等教育機関である。

実践的人間力は、人間の本质が相互扶助と役割をもっての社会的存在ということから、個人的な能力という視野に限定されているものではない。つまり、自己責任論的な個々の人間力を究極的に問うものではない。人間は、相互の力のなかで、それぞれが、個性をもっていることである。この個性も共生や協働・協同社会のなかでのリーダーシップ性の能力養成が大学の社会的役割として求められているのである。

ところで、能力差は、千差万別であり、個体としての違いがある。それぞれの個々人は、人間として、尊重されて、それぞれの役割を社会的に果たすことができる。知的障害者が、健常者と知的労働や専門的な技術的労働の関係からみれば生産性が劣ることはいうまでもない。

しかし、健常者と比較して、知的障害者の人間的な努力、人間的な情熱は決して劣っているとは限らない。知的障害者の単純な労働をくりかえし、ひたむきに、健常者にできない能力をもっているのである。この仕事に対して、健常者に労働の意欲性から感動をあたえることは多々あるのである。健常者と共に知的障害者が働くことによって、知的障害者も健常者も、その能力を相互の力によって、大きな力になることを見逃してはならない。

そして、健常者は知的障害者から大きな生きる意欲の影響を受けることも少なくない。ここに、相互の人間関係をとおしての人間力の意味があるのである。それを感じ取れる人間性の力が健常者に能力として求められる。人間力は個人的なことではなく、相互の人間関係をとおしての共生の集団力、社会力である。

健常者と知的障害者という関係ばかりではなく、すべての人間関係において、能力差の違いによる相互の扶助関係、集団的に助け合いながら総体として力を発揮できる能力が要求されているのである。この能力は、集団的な調整能力、相互に役割を発揮して、それを尊重しあう能力が必要である。集団として、この能力を発揮するためには、集団におけるリーダーシップ性をもった能力が必要である。

このリーダーシップ性も個性的な能力であり、特定の人間に付与されたものであるが、相互にリーダーシップ性も個々の役割の変化のなかで固定されているものではないこともあることを忘れてはならない。集団の力を発揮していくために、リーダーシップは重要な役割を果たすことはいうまでもない。

人間らしく生きていくための実践的な人間力は、特定の分業化や効率化が幅をきかせ、専門家のエリートを重視し、ものごとを機械的に処理するものでは決してない。リーダーシップを発揮する能力と固定した権威的地位をもつエリートとは異なる。実践的人間力は、相互の人間関係力、集団力や社会力であり、エリートの養成ではなく、利己主義的な競争主義や自己責任の個人能力のみを求めるものでは決してないのである。

利己主義的な競争主義や自己責任能力では、個々の人間のところを軽視し、人間的な相互の慈愛の精神が消え、人間的な幸福の探求が金とものや利己を絶対化するような歪みの状況になる。

利己主義的な競争主義や自己責任の能力を社会的に求めていくことは、社会の様々なところで、人間的な良心に反する不祥事事件が起きていく。そこでの人間関係は、自己の利益のための手段として利用の対象であり、本来の慈愛の精神での人間的な相互の関係ではなくなる。そして、社会的孤立が生まれていく。

自殺者の増大も社会的な孤立のなかでの病理現象である。自殺は内向的であるが、外に向かう社会的病理現象としての犯罪がある。職場でのいじめや学校でのいじめは、社会的な絆、人間的友愛関係や慈愛の精神の欠落のなかでの現象である。人間的な関係のない犯罪の典型的な事例として、だれでもよいという無差別通り魔殺人という凶悪事件が起きている。これらの社会的な退廃現象のなかで問題解決に、

教育の果たす役割は大きい。

しかし、教員の採用・昇任をめぐる教育委員会や教育現場の管理者が汚職事件を起こしている現実がある。これは、人間力を考えていくうえで、極めて深刻な問題である。人間は教育によって真の人間になっていく。心の荒廃現象が広範にあらわれているなか、教育者自身、また、教育システムそれ自身の人間的な改革が求められているのである。まさに、現代は、教育界において、人間性が鋭く問われる時代である。

ここでは、人間の幸福とはなにか。いかに生きるのか、人間の力とはなにか、リーダーとはなにか、社会的責任・倫理とはなにかが問われているのである。人間力を学ぶことの設定は、以上のような現代社会のこのころの問題現実を直視し、人間らしく生きていくための力を実践的につくりあげるための大学教育をめざしたからである。これらは、大学としてのあたらしい人間性を求めての実践的な民主主義のための教育である。

(5) 実践的人間力としての有徳の大学の役割

大学は、専門性や教養教育を実践し、市民的な道徳力を形成していく場である。大学は、人類の智恵や科学技術を蓄積し、人類的視野から知を創造する拠点の機関であり、科学、学問が最も尊重される場所である。稲盛アカデミーは、生き方、平和、南北問題、環境問題などを有徳からアプローチする授業科目を積極的に提供した。

実践的に人間らしく生きるための諸能力形成としての人間力を学ぶということから、科学や学問があらためて問われる必要がある。高度な科学や技術、学術の府としての大学で学ぶことができるのは、個々の学生にとって、意義のあることである。その意義ある学びを果たすには、立身出世的な競争主義的な自己利益のためということの世界だけではなく、社会的役割のなかで自己を見つめ直すことが求められる。

実践的人間力の視点から科学や学問を学ぶことは、人びとの暮らしや仕事を見つめながらの関係であり、自らの幸福はもちろんのこと、人びとの幸福との関係で自己の学びを意味づけていく能力が求められている。

科学の大衆化、学問の大衆化ということを経験的な上から教え込むという論理ではなく、人びとの暮らしや仕事から課題発見して、課題探求をしていく能力が必要なのである。実践的人間力は暮らしや仕事から離れた抽象的な世界ではなく、現実の課題解決、課題探求から離れた訓誥学ではない。

人間らしく生きる人格の修養にとって、人びとの暮らしにとって、また、幸福にとって、民主主義にとって、科学とはなにか、学問とはなにかということが問われるのである。いうまでもなく、大学は、学術の府としての科学や学問を身につけていくことを基本にしていかねばならないことはいうまでもない。

実践的人間力を学ぶということは、人間らしく生きるための諸能力の形成を意味している。大学の教養教育は、その能力形成の基盤である。人間らしく生きるための諸能力形成の基点は、人間愛と人間的感情の豊かな形成である。

人間愛と人間的豊かな情操は、人間の尊厳を大切にすると人間的関係のコミュニケーションの能力を基本的に求める。大学での教養教育でどのように人間関係的コミュニケーション能力を身につけていくのか。大学での学問を基礎にしたコミュニケーション能力を身につけていくうえで、教員と学生が相互に自由に学びあう関係が必要であり、そのためには、少人数やワークショップ形式、体験学習も大切になっている。コミュニケーション能力は決してスキルという枠に限定されるものではなく、学問や科

学を学ぶ過程のなかでの能力形成が学術の府としての大学の役割である。

学術の府としての大学教育において、従前の専門化された教育ばかりではなく、科学と人間らしく生きる諸能力ということが問われているのである。学術の府としての大学教育は、単に専門家の養成ではなく、幅の広い教養人と人間性をもった、また、豊かな情操をもった人格を身につけた文化人の養成でもある。

能力、個性、文化、価値観など、それらの違いをお互いに認め合い、寛容な立場にたつことが人間的コミュニケーション力である。多様な文化や価値観にふれさせるためにも国際的な体験学習などの異文化体験も取り入れていく必要がある。「ベトナム農村体験学習」「南北問題と世界の未来」「イスラム社会と宗教」の科目提供は、以上の理由からである。

人間的自己表現は、言語能力はもちろんのこと、芸術やスポーツなど人間の五感と身体を豊かにしていくことでもある。人間力を発揮するために、こころと体の健康は、必須条件である。人間力とは分業化された専門的知識を習得するだけでなく、真理を様々な角度から総合的視野から求めていくものである。

この際に、学生の多様な体験を重視し、積極的に社会人を活用しての各界各分野の人生経験の語りの場をつくり、学生自身の職業観や生き方の確立を支援し、考える力、工夫する力の基礎を提供することも学生の視野を広げ、認識と技術を確かなものにして、情操を豊かにしていくためにも重要である。

この教育を実施していくうえで、社会人の講師の活用ばかりではなく、社会人と学生とが共に学ぶ場は極めて大切である。この意味で、稲盛アカデミーは、共通教育提供科目を、公開授業として、一般社会人が受講できるようにしたのである。

人間の暮らしは、社会的存在である。一人で生きているのではなく、社会のなかで生きているのである。若い青年学生にとって、社会人と共に学ぶことは、実際的な社会経験をしている人々の意見から人間の暮らしの社会的存在を知ることができる。また、社会人は若い青年学生のもっている正義感や真理にたいする情熱心もふれることができ、そのエネルギーをもらうのである。

社会の基本的な単位は家族である。日常的な生活の単位がコミュニティと職場である。人間は働くということをとおして、また、暮らしをとおして社会との関係をもっていくのである。これらのことを社会人と学ぶことをとおして、実感的に知ることができるのである。

人間の起源は、労働という営みと氏族共同体社会が生まれたことによって、動物のヒトから人間に進化したのである。労働と社会的存在である人間は、天与から目的意識をもつことを与えられた。人間的行為は、目的意識をもって生きるということである。

この目的意識性は、人間的智慧として、持続力、論理的思考力、創造力をつくりだしたのである。学術の府としての大学の理念は、人間の目的意識性が最も自由に発揮できる場でもある。それは、学問の自由が大学にとって生命線であるからである。知的好奇心、学問の創造、知的創造が基盤になって、人間の目的意識性の実践がされているのが大学である。

社会的存在としての人間は、絆、仲間をもって生きることが不可欠である。人間の絆を理解していく場の設定は大切である。その教育方法を確立するための条件として、学生が自由に討論でき、教員と共に考えられる少人数教育の場が必要である。学生自身が課題を設定して、真理探究、創造していくプログラム学習も大切な教育方法でもある。

動物は、自然そのものであるが、人間は目的意識をもつことによって、労働する力で、自然に働きかけ、自己の欲望を実現しようとしてきたのである。動物の本能は、自然そのものである。動物は、自然的生態系のなかで本能が機能している。人間は、動物から進化したもので、動物的な本能をもってい

る。しかし、人間の欲望は、目的意識をもつことによって、動物的な自然的秩序からの本能を超えていくのである。

それは、欲望の肥大として、飽くことなく拡大していく。自然のなかで生きていた人間は、自然を征服し、欲望を実現してきた。ものが豊かになることによって、他の人間を支配し、戦争を起こし、自然環境を破壊するようになったのである。平和を考えていくことは、人類の文明史以来の課題である。稲盛アカデミーは、有徳という視点から授業科目を考えたのである。

人間は、実践的に生きていくための育てによって人間になってきた。人間は文明をもつことによって、人間としての徳をもつことを要求されたのである。学術の府としての大学は、学問をすることによって、合理的判断、科学的判断のできるすばらしさを体得できる場所であり、人間のもつ動物的欲望を理性によって、コントロールできる可能性をもてる場でもある。従って、自己欲望の肥大や動物的な本能的行為から解放された場のはずである。大学は理性と徳の関係をもって教育と研究が実践される場である。このためには、幅の広い教養性が大学人に不可欠になっているのである。

持続可能な開発と平和の教育は、現代における社会的責任と倫理という人類史的教育課題である。垂水にある鹿児島大学演習林を活用しての大野ESD（持続可能な開発のための教育）自然体験学習は、人間と自然との関係をじっくりと考えてもらうための稲盛アカデミーとしてのカリキュラム提供である。

持続可能な開発のための教育や平和教育は、科学・技術の細分化ではなく、総合的な視野から人間的な真理の探求や智慧と結びつての徳の教育である。徳の教育は、人間愛と社会のルール、自治のためである。稲盛アカデミーは「国際平和と有徳」の科目を積極的に位置づけた。

徳は、教育によって身につくのであり、人間が人間としての善さを磨くことである。それは、魂（こころ）をすぐれた善いものにするための教育を実現していくことである。

ギリシャ人が教養を重視したのは、人間の徳をめざしたからである。ギリシャの人間教育は、教養教育であった。プラトンの学習プログラムは、数理的学問による長い陶冶の道を人間教育の必須科目とした。人間は自然を科学的に認識し、論理的、数理的にものごとを考えて、精神の自由を獲得していくのである。科学や技術は、人間の精神を自由にしていく作用をもたらしていくのである。科学を身につけることに人間は、将来を予測して、自然をコントロールしていく力を身につけてきた。

プラトンと同時代のイソクラテスは、言語にかかわる能力の開発の重要性を教養教育として重視した。ギリシャでは、魂の世話、魂の配慮は徳をもつことによって達成すると考え、人間教育としての教養を重視したのである。人間は本能で生きるのではなく、魂によって生きることが、動物的人間から解放されて、人間的になるということである。日本語教育を人間としての教養教育、日本の国際関係からの日本文化の位置づけから「異文化理解とコミュニケーション」「アジアの日本語教育」の科目を提供した。

中国では、孟子によって、人間はもともと素質として善が備わったもので、それを仁、義、礼、智、信という教育によって養うという性善説を唱えた、また、荀子は、人間は生まれながらに利己的であって、人をねたんだり、憎んだり、誠実さを保つことができず、快樂に走っていくという傾向をもっているため、教育によって、それを正そうとしたのである。中国では、人間のここには、2通りの見方があった。この解釈は、人間には、2つの側面があることをいわれてきたと理解すべきである。

稲盛和夫氏も語るように、食欲、怒り、愚痴という煩惱の三毒を抑えるために、人生の目的はこころを磨き、人間本来の善きおもいを伸ばしていこうとする見方は文明の発祥の昔からの課題であったのである。「生き方と道徳」の科目は、この意味でも大切な位置をもっている。

まとめ

稲盛アカデミーは、鹿児島大学の全学の叡智を結集して、社会人、企業人、地域リーダーとも協力しながら、倫理と道徳と結びついた実践的人間力を学ぶということを基本理念にして、総合的に幅広く教養教育科目を提供していくものである。

とくに、実践的人間力として、経営と労働を結びつけながら生き方、実践的倫理、職業観教育、人間力経営を重視した。これらの切り口から具体的に実践的人間力を学ぶことに、入らなければ観念的で抽象的な人間力教育になってしまう。具体的な切り口がなければ、生きた暮らしや仕事と結びついていかない。

稲盛アカデミーの切り口は、生き方、実践的な倫理や哲学、職業観、人間力経営ということを国際的な視野から地域と企業という切り口からアプローチするものである。従って、重点科目を指定して、稲盛アカデミーとしての実践的人間力を学ぶことを構造化したものである。また、実践的人間力を学ぶということから、授業科目の特徴的方法として、体験活動、進路・職業観教育、先人・先輩の人生経験と語る場の設定などを工夫した。

鹿児島大学の共通教育の科目群に対応させての人間教育から出発し、思想と文化、社会と歴史、人・生命・環境、自然と数理、科学技術と応用という分野まで設定している。この科目群は、稲盛アカデミーの設定ではなく、既存の類型にあわせているにすぎない。この科目群に対応させて、それぞれ、生き方、実践的倫理・哲学、職業観、人間力経営など、実践的人間力を学ぶということに関連づけながらの科目を設定した。

稲盛アカデミーとして、生き方、実践的倫理や哲学、職業観、人間力経営を基礎にして、働くことや経営を人間らしく、道徳的に、様々な科学技術を応用して考えられるようなカリキュラム開発を行い、具体的に、そのカリキュラムの教育活動をとおして、現代的な鹿児島大学での教養教育課題に貢献の一端を担うものである。

前期開講科目一覧 ●印は重点科目

担当教員 (所属名)	科目名		授業概要	受講 者数	公開 授業
奥 健一郎 (稲盛アカデミー)	●先人に学ぶ リーダーシップ I	木2	先人のリーダーシップを、常に現代社会との事象と関連づけながら講義をする。人間としての生き方・モラルのあるべき姿を、彼らの生き様を通じて様々な感じ取れる内容の講義とする。最終的には、様々なケースを通じて、自分なりの人生観・リーダーシップの枠組みを構築できることを目的とする。取り上げる人物は、以下を予定。 1. 聖徳太子 2. 吉田松陰 3. 西郷隆盛 4. 坂本竜馬 5. 新渡戸稲造 6. 松下幸之助 7. 安岡正篤 8. 中村天風	50	3
ジェイ スミス (稲盛アカデミー)	アメリカの ベンチャー文化	木4	アメリカにおいてはベンチャービジネスが大企業へと成長し、経済の発展に大きな役割を果たしている。このようなベンチャービジネスを育むアメリカのベンチャー文化についてドラッカーの理論を取り上げる。企業家としての精神・活動・思考様式などを学んでいく。また、自由にアイデアを自分が起業したことを仮定して事業計画に具体化する。学生自身が起業について自由に考えていく事を授業目的とすることから、討論、発表を重視した授業方法を展開していく。	38	0
	薩摩とカリフォルニアの 交流史	木5	薩摩/鹿児島地域とカリフォルニア地域との歴史的・文化的な関係を基礎にして、それぞれの地域における現代的な諸課題に光をあてる。まず薩摩/鹿児島地域の歴史と文化、カリフォルニアの歴史と文化について取り上げる。そして、二つの地域を比較し、その違いや共通点を明らかにするとともに、両地域の将来展望について考えていくこととする。	15	2
神田 嘉延 (稲盛アカデミー)	●生き方と道徳	水3	生き方と道徳を現代社会との関連や歴史社会学的側面から内容論の講義をする。生き方と道徳を現代社会のモラル問題から位置づける。日本の歴史における道徳思想家を積極的にとりあげ、その現代的な思想的意義をモラル問題と生き方を関連させる。日本の仏教思想にみる道徳観、日本道教思想にみる道徳観、日本の民話・説話にみる子育て観 貝原益軒の子育て論、伊藤仁斎の子どもの見方、石田梅岩の商人教育論、安藤昌益の環境・労働観・平等思想等、渋沢栄一の経済倫理論、新渡戸稲造の武士道、稲盛和夫の人間観や生き方など。	309	2
	●人間力経営	金2	人間力経営を考えていくうえでの前提になる人間力ということを中心として問題提起する。人間力とは、人間らしく生きるための諸能力である。ここでは人間の本質を考えるために生きるための諸能力を十分に発揮するための経営のあり方を考えていくものである。人間力経営論の日本的経営思想の渋沢栄一、大原孫三郎、松下幸之助、稲盛和夫、赤石義博などの人間的経営論を紹介しながら日本の経営における人間力について問題提起する。学生自身に日本的経営における人間論と人生論についてじっくりと考えてもらう授業を考えている。	97	2
	●20歳からの ハローワーク I	木5	現在の日本の大学卒業も人生目標を職業選択から考えるために、地域で自ら学んで、教育活動に力をいれている経営者をゲスト教師として招聘して、経営者の生き方、企業現場での社員と共に学んでいる実践を話してもらい、学生自身が様々な分野での職業での生き方や学びの多様性を認識して、自ら進路を考えていけるような基礎能力をつける内容とする。方法は授業担当者からゲスト教師の位置づけをしてもらい、そのうえにたって、ゲスト教師に語ってもらうような授業形態をとる。質問時間も十分に保障して学生と授業のなかで対話できるような授業方法をとる計画である。	104	0
	教育学概論 —人間力を教育から—	木2	授業の内容は、人間力という視点から教育の本質を理解できるように目的を定めた。教育に関する基本的な視点を構築するために、4つの視点から問題を展開する。第1に、人間の本質と教育。第2に社会構造と教育。第3に、公教育論としての学校論。第4に、国民の学習権と学校再生における地域の役割。以上、4つの柱をたて、授業を展開していくが、講義では、必ず、学生の意見をとりあげて授業の方法を考えていく計画である。	127	0
	国際平和と有徳	金5	国際平和を有徳という視点から授業を行うことを目的とする。国際平和思想について社会哲学の視点から問題提起をし、具体的に、平和活動や国際理解教育、異文化理解教育、持続可能な開発教育の実践を紹介しながら平和と富国を有徳を考えてもらう。この際に国際的な人類共通の合意点としてのユネスコの思想の思想を重点に考えてもらう。また、平和と富国を有徳の思想を日本の思想史のなかから問題提起して、日本の伝統的な平和思想を考える。学生に平和と有徳を考えてもらううえで、双方向方式による討論方式や学生自らが参加しながら問題を探求していく授業方式を工夫して行う。	297	1

担当教員 (所属名)	科目名		授業概要	受講者数	公開授業
吉田 健一 (稲盛アカデミー)	陽明学入門	水2	本講義は、大きく分けて、4期に分かれている。第1期(1回目から3回目)は中国における儒学・儒教の基本についての知識を学び、その後の大きな2つの流れに朱子学と陽明学がある事を学ぶ。次に本講義で取り上げる「陽明学」(と今では呼ばれる思想)を生んだ王陽明について人生と思想の基本概念を学ぶ(第2期にあたる4回目から7回目)。次いで、日本における儒学の流れ、とりわけ陽明学に影響を受けた近世の思想家と志士と呼ばれている幕末維新の思想家・政治家の思想や行動に学ぶ。これが第3期で(8回目から13回目)である。第4期目は、14回目と最終回であるが、昭和の思想家・文学者を取り上げた後、現代の政治・行政・経済の状況をどうみるか、現代はどのような時代であるかについて受講者相互の議論を通じて、これからの混迷の世の中をどう打ち破るかについて議論をしまとめとしたい。一方的講義ではなく、適宜、担当者と受講者は議論をしながら進めたい。また、本講義のタイトルには出ていない人物でもおりに触れ紹介する予定である。	17	4
萩原 豪 (稲盛アカデミー)	エネルギー環境教育論	水4	最近、石油価格の上昇や地球温暖化問題(CO2削減)などが取りざたされるようになってきました。しかし、日常生活では、資源・エネルギー問題について深く調べたり考えたりする機会は少ないと思います。本講義では「複眼的な思考」を養いながら、「持続可能な社会」を構築するための手法として環境教育とESD(持続可能な開発のための教育)について、特に資源・エネルギー問題について注目しながら、受講生と一緒に考えていきます。	38	0
	環境教育・ESD入門 I	火4	講義は演習形式で行います。環境教育/ESD(持続可能な開発のための教育)関わる国内外の動向を理解すると共に、環境問題について多角的な視点から考察し、環境教育を実践する機会を共有します。受講生は必ずワーキンググループ(WG)に参加し、グループごとに研究活動を行います。WGは①自然②資源・エネルギー③社会(企業)④地域⑤大学⑥ラーメン⑦トイレ⑧焼酎⑨温泉の9つを設定予定です。	30	0
内田 芳夫 (教育学部)	知的障害児の心理と病理	水2	人間発達の身体的基礎、中枢神経系の生理と病理、感覚障害の生理学的基礎について解説する。 1.全身の発育、感覚・運動の発達 2.障害の見方、先天異常、遺伝のしくみ 3.中枢神経系のなりたち、中枢神経系の奇形 4.運動の発達とその障害(脳性まひ) 5.発達障害とその療育について 6.感覚障害児の生理と病理 7.感覚障害児の療育 人間発達の身体的基礎や中枢神経系の病理に触れる。知的障害児の定義や原因についての知識を習得し、併せて知的障害児の知覚・認知、運動、言語、社会性などの発達と障害について言及する。知的障害児の代表例としてのダウン症やWilliams症候群児について理解を深める。	27	6
齊藤 祐 (教育学部)	コミュニケーションと音楽	木2	3人の講師が登場し、それぞれがこれまでに発信してきた芸術・音楽表現活動を紹介する。同時に、社会に発信してきたメッセージを解説する。後半では、実際に音楽を媒体にコミュニケーションすることで、「相互に伝わる表現とはなにか」ということを実技により体験する。なお、池田(ハープ)と吉侯(作曲)は集中講義による授業を予定している。	34	2
武隈 晃 (教育学部)	地域づくりとリーダー論	火1	地域課題とその解決に向けた地域づくり事業の洞察、及び地域づくり事業経営計画の検討を通して、地域づくりに関わる基本価値の獲得を目指す。 特にリーダーシップ、協働、ネットワーク、人権・ジェンダーなどの重要概念については、組織論や社会心理学・社会学等における成熟の過程を辿るとともに、ローカル・コミュニティにおける具体の事例を検討することを通して、その理解を促す。 基礎的知識を獲得するため、そのことに必要な最低限の講義形式は確保するが、「地域づくり事業経営計画」の策定にかかる、演習形式・討論形式の授業、及び斯分野実務家との対談形式の授業を適宜組み合わせ、実践的理論構築の過程を追体験させる。	18	1
長谷川 雅康 (教育学部)	技術と文化	金1	人間社は技術(生産技術)を用いた労働なくして存続し得ない。このため、この講義では技術とは何かを農業技術と工業技術の具体例をとおして考える。人間と自然との関係を生産技術と労働を介して理解できるよう学習する。また、生産のあり方、生活のあり方、文化のあり方を技術との関わりで考える。技術を学ぶ意義についても考察する。この講義では、諸学者を対象に考えているので、基礎的な事項で校正する。授業に際しては、必要に応じて資料、VTR、実物などを交えて講義する。	332	1
井倉 洋二 (農学部)	森・ひと・体験	集中	農学部附属高隅演習林で実施する4泊5日の合宿授業。森の中でのキャンプ生活と様々な自然体験活動を通じて、人と自然、人と人の関係について学ぶ。	20	0
	大野ESD自然学校 I	集中	鹿児島大学と垂水市が共同で設立した「大野ESD自然学校」(垂水市)で実施される自然体験活動や総合学習の受け入れ事業などにボランティアスタッフとして参加し、児童生徒や地域住民との交流体験を通じて、環境教育、ESDを実践的に学ぶ。	8	0

神田：進取の精神による実践的人間力の教養教育

担当教員 (所属名)	科目名		授業概要	受講 者数	公開 授業
秋葉 澄伯 安藤 哲夫 (医学部)	環境汚染 昨日・今日・明日	木2	私達人間は地球環境に適応しながら、石器という道具を生み出した旧石器時代に世界人口300万人を養う食糧確保手段を獲得した。その後、チグリス・ユーフラテス川中流で始まった農耕(農耕牧畜革命)と産業革命(人工移動手段+化学肥料の発明)を通して大量の食糧確保に成功し、63億人の人口を養えるまでになった。中生代の爬虫類は別格だが、地球史上、これほど栄えた高次消費者としての動物種はいない。ところで、我々はさらに栄えるのだろうか、いまや滅亡の道に足をふみいれたのだろうか。農耕、牧畜は人々が地球環境と共存していた時代だったのであろうか。産業革命がもたらした人為的地球環境に対し、人間以外の生物を無視(巧みに利用)しながら、今日の繁栄を得ているのだろうか。講義では、過去の環境汚染の実体を学習し、その反省の下でもなお様々な環境汚染が現在も発生しているか否かを知り、未来(次世代)に残すべき地球環境の理想を、学生諸君と共に考えようとするものである。	186	1
小原 幸三 (工学部)	連帯による 新エネルギー革命	水2	地球の温暖化、化石燃料の枯渇の深刻な問題が直前に迫っている。今、「何をなすべきか？」がすべての世代に問われている。この授業では、現在の自分の社会における生活を調査し、社会との関わりを具体的に追跡する。調査結果は、定量化できる指標はクラス全体でデータベース化する。特に、定量化できない指標についてクラス全体で討論し、意見を集約する手法を学ぶ。調査と討論を踏まえて自分のこれからの学習活動の目的意識を明確にするために「My Project」を企画する。講義では、海外で活動した貴重な経験を持つ方々に講義にボランティアで参加していただき、一緒に討論する。最終的に、この講義ではできるだけ早期に海外に出かけて、同世代の交流を行うための準備を行なう。海外で得た経験や人のネットワークを後輩に伝えて、経験や知識の循環の輪の中に自分を形成し、新エネルギー革命を担うことが目的です。	10	0
門 久義 (工学部)	職業人と実践倫理	木2	本講義は、普遍的な「真・善・美」を追求する、いわゆる哲学的な倫理ではなく、現代社会の職業人が職務を遂行する際に直面する諸問題を正当に判断し対処するために必要な倫理的判断やその規範について、具体的に講述する。社会で活躍されている専門的職業人が講師となり、それぞれの職業・分野において直面する倫理問題などを具体的に・体験的に聴くことができる。	70	1
松野 修 (生涯学習 教育センター)	仮説実験授業 I	水2	これまで日本では上級の学校に進学すればまちがいなく収入はふえ、社会的な出世を期待することができた。しかし日本が先進国の仲間入りを果たし、上級学校への進学者もふえるにつれて、学校はかならずしも苦勞しながら勉学に励む場ではなくなってきた。こうした時代にあって、教育にはどのような新しい内容や方法がもたらされているのか。本講では「仮説実験授業」にもとづいて将来の教育にもとめられている基本的な内容、方法などについて解説する。 とはいえ「いま、求められている教育の方法はなにか」と大上段にふりかぶってみたいところで、具体的な授業の内容や方法を抜きに論じるのでは中味のない議論になってしまう。ひとくちに授業といっても、そこには理論、技術、技能の3つの側面がある。まずはお手本になるような授業を紹介し、技能を磨き、理論の理解を深められるよう配慮する。	30	1
八幡 政則 (非常勤講師)	二宮尊徳に学ぶ	木2	天地化育の理を悟り、実践躬行を身につけるために、教科書に『二宮翁夜話』を用いる。学習方法として講義の中に輪読学習方式をも取り入れたい。	5	0
森田 豊子 (非常勤講師)	イスラーム社会と宗教	水3	7世紀から存在するイスラーム世界は独自の歴史や文化を持つ。西洋世界とは異なった知のあり方を持ち、連綿と続く歴史の中でそれを維持してきた。この授業では、グローバル化する現代世界において、この特異な価値観からくるイスラームが他の世界とどのように関わろうとしているのかについて学ぶことによって、多様な視点から物事を考えることのできる態度を身につけることを目標とする。	142	0
野崎 勉 (非常勤講師)	循環と共生の技術	月2	産業革命以降、おびただしい化石燃料の多用と、科学技術の発展とともに地球温暖化を始めとする地球規模の環境変化が顕在化している。過去の蓄積としての化石燃料に依存しない自給自足を旨とする資源循環型社会を目指し、60億余の世界人口を養うにはステップアップした共生技術の開発と、自然との共生、国家や民族を越えた共生が不可欠である。さらに、技術の専門家、その適用者と利用者のコミュニケーションを深めるため、科学技術と社会について考え、市場では売り手と買い手の環境意識を高揚し、持続可能な発展社会での考え方やビジネスのあり方について講述する。	82	0
安藤 保 (非常勤講師)	薩摩藩の教育史	木2	本授業は、江戸時代薩摩藩で行われていた武士子弟教育を取り上げて、その特徴・問題点などを探るものである。武士子弟教育は、上級士と中・下級士の場合では異なるが、本授業では中・下級士の教育の基本となった郷中教育を中心に講義する。また、郷中教育の行われる背景、影響および薩摩藩武士の「土風」の変化などについても触れる。	13	0
尾崎 由美子 (非常勤講師)	異文化理解と コミュニケーション	火2	近年、コミュニケーション能力の低下が問題となっているが、その原因の一つに他者との関係づくりを必要とする場が減少していることが背景にある。そこでこの授業では、他者との関係づくりを次のステップで意識的に学ぶことで、人間力の一助とすることを旨とする。まず外国人を対象とする日本語教育の現場の事例を提示し、その検証によって、多様な文化の一つとして自己が存在することを理解し認識する。そして、他者を理解し、自己を理解し、自己を開示するというコミュニケーションの各要素を見つめなおすことによって、自分にとってのよりよいコミュニケーションを作り上げる。なお、この授業は異文化理解を必要不可欠とする日本語教育の事例を中心に進めていく。	36	0
			合計	2,135	27

後期開講科目一覧 ●印は重点科目

担当教員 (所属名)	科目名		授業概要	受講者数	公開授業
奥 健一郎 (稲盛アカデミー)	●稲盛セミナー	水5	意義ある人生を送るためには、熱意や能力と共に、その人の、人生に対する『考え方』が大切になってくることを理解する。 そのために、様々な著名人の講演を通じて、人生の生き方・理念・哲学を肌で感じ取り、それらの必要性を認識することに重点を置き、結果として、各々の受講生が自分なりの人生観を確立する講義内容とする。 また、人間としての幅広い教養を身に付けるという観点から、講師の対象者は、政治、経済からスポーツ、芸能等まで幅広い分野に及ぶ。 これらの講義を通じ、様々な分野の基礎的素養を習得することにより、多角的な物の見方を養うことができる授業とする。	200	9
	●経営哲学	水2	1. 経営フィロソフィの核心と現代的意義について講義する。 2. 京セラ・KDDI創業者の稲盛和夫氏をとりあげ、そのマネジメントの特色、歴史的意義、背景等について講義する。 3. 経営哲学から見た日本型経営の特色と、その発展のあり方・可能性等について、様々な経営者のケースを取り上げて、多角的視点から講義する。 取り上げる経営者は、以下を予定している。 ・松下幸之助 ・盛田昭夫 ・井深大 ・佐治敬三 ・塚本幸一 ・吉田忠雄 ・カルロスゴーン ・小倉昌男 ・鈴木敏文 ・樋口廣太郎 ・永守重信	35	2
	●先人に学ぶ リーダーシップⅡ	木2	先人のリーダーシップを、常に現代社会との事象と関連づけながら講義をする。 人間としての生き方・モラルのあるべき姿を、彼らの生き様を通じて様々な感じ取れる内容の講義とする。 最終的には、様々なケースを通じて、自分なりの人生観・リーダーシップの枠組みを構築できることを目的とする。 取り上げる人物は、以下を予定。 1. 聖徳太子 2. 吉田松陰 3. 西郷隆盛 4. 坂本竜馬 5. 新渡戸稲造 6. 松下幸之助 7. 安岡正篤 8. 中村天風	27	5
	地域経営入門	木5	地域経営の向上を、『人間力』の観点からどのように高めていくか、に重点を置く。 企業経営においては、ビジネスモデルや人事制度等を導入するだけではならず、そこに集う社員のベクトルがそろい、モチベーションが高まって初めて向上するのと同じように、地域においても、単に優れた条例・制度を導入するだけで活性化することはあり得ない。 この観点から、いかに地域住民の意識を高め、人間の活性化をもって地域の活性化へと導きだすか、というテーマを種々の観点から探究し、一定の理解を得ることを目的とする。 以上の事項を達成するために、以下の事項に重点を置く。 1. 諸外国の地域マネジメントの実例 2. 地域活性化に求められる人間力 3. 我が国の地域経営の特色 4. 地域に求められるリーダーシップ 5. 地域社会の課題 以上の内容を行うために、 1. ゲストスピーカーの招へい 2. インターンシッププログラムの導入 等々の方法を用いる。	19	0
ジェイ スミス (稲盛アカデミー)	アメリカの ビジネスと文化	木4	アメリカのビジネス変遷を、アメリカ文化の観点からとらえる。とくに、文化が企業の発展に果たす役割について、チャンドラーやドラッカーの理論を中心に取り上げる。 さらに、21世紀のアメリカのビジネスの展望について、学生と共に考える。この際、特に、ビジネス文化、現代のビジネスプロセス、ベンチャービジネス文化、企業のグローバル化、金融危機などを考える。	22	1
宮廻 甫允 (稲盛アカデミー / 法文学部)	●経営管理入門	水1	企業組織を小規模の独立採算組織(アミーバ)に切り分け、効果的・効率的な企業経営を実現したアミーバ経営について取り上げる。アミーバ経営は、採算管理のための「時間当り採算表」、採算計算の基準となる京セラ会計原則、そしてこれらを支えるフィロソフィからなっている。アミーバ経営の組織を動かす仕組みとともに、その本質をなすフィロソフィについて考えることとしたい。	20	0
神田 嘉延 (稲盛アカデミー)	●20歳からの ハローワークⅡ	集中	職場体験学習、インターシップをとおして、人生目標を職業選択から考えるために、地域で自ら学んで、労働体験をさせる。職場体験をとおして、経営者の生き方、企業現場での社員が働いていることとおお人生論や労働論から読み取れるような体験学習をする。学生自身が職業での生き方や学び方を体験認識して、自ら進路を考えていけるような基礎能力をつける内容とする。	9	0
	●ベトナム農村 体験学習	集中	ベトナム農村の体験学習をとおして発展途上国との異文化青年交流を実施する。日本語を学ぶベトナム農村出身者のふるさとを訪問する計画。ナムディン日本語文化学院に学ぶベトナム農村青年とふるさとの学校教育体験や村の青年たちの交流を実施する。鹿児島を中心に日本の農村文化について事前に講義をする。交流のための基礎的知識を身につけておく。ハノイの社会科学院と日本文化学院のスタッフが全面的に協力する。	10	0

神田：進取の精神による実践的人間力の教養教育

担当教員 (所属名)	科目名		授業概要	受講者数	公開授業
吉田 健一 (稲盛アカデミー)	新しい公共性と協働	木3	現在「公共性」について議論する事は「市民」と「社会」、「国家」と「国民」、「経済」と「市場」の問題を考える上で非常に大きな問題である。しかし、本講義では原理的、思想的な議論からは入らず、現代の日本で取り分け、関心が高い「教育」「福祉」「労働(雇用)」問題について、日本の近現代に遡って、どの時代にどのような政策がとられ、担い手(官・公・民)は誰であったのかという事について考察したい。公共政策といわれる分野は幅広いが、周知のように「教育」「福祉」「労働(雇用)」問題はどれも現代日本の大きな問題である。今の問題の原因はどこにあるのか？過去にはどのように解決されてきたのか、(また潜在的な問題があったのか)を様々な角度から考察したい。しかし、本講義は「歴史」の講義ではない。未来に向けた「新しい公共性」の構築の為に、近代化の正負の側面をみて考えたい。そして「官」「イコール」「公」ではないことなどを確認し、但し、国家を悪、市民を善とする二元的な議論に陥らないように国家や政治の役割に十分注意を払いたい。	118	6
	経世済民の 公共政策学入門	金4	本講義は、1回目「はじめに」から9回目「政策過程」までは、主として政治学の立場から知識を伝授する。次に10回目から12回目では、戦後の日本政治史を概観する。今に続く日本の課題がどうやって生まれたかを知るためである。13回目から15回目は基本的知識は伝授するが、受講生各人の意見を表明する場を設けた。(テーマを決め、討論、ディベート、発表などを想定)これで、参加度、理解度を見る事とする。評価は立場や考え方に依らず、どこまで自分なりに深めたか、反論に対して説得力のある根拠をもって自説をもつに至ったかを評価したい。「地方自治」「国際政治」「安全保障」「構造改革」などは、どれも極めて現代的なテーマかつ我々自身の問題である。本講義を「経世済民の公共政策学入門」としたのは、受講生諸君が公共の問題に主体的に関わる態度、基本的姿勢を涵養する事を期待しているからである。受講生諸君と様々なイシューについて議論し共に地域・日本・世界の未来を考えて行きたい。	94	3
萩原 豪 (稲盛アカデミー)	持続可能な開発と 東洋の環境思想	水4	1987年、「持続可能な開発」(Sustainable Development)という考え方が世に出てきました。これ以降、現在まで地球環境と開発を巡る問題には「持続可能な開発」という考え方をを用いることが多くあります。しかし、この言葉の共通認識はあるものの、その定義はいまだ定まっていないのが現状です。 他方、東洋社会には伝統的な「人間は自然との関係性の中で生きている」という「持続可能な開発」に深く関連する環境観が存在します。東洋社会では、人間の利益を絶対的に考えるのではなく、自然生命の固有価値のなかに人間の生存を見出しています。日本における自然崇拜も、この事例のひとつと言えるでしょう。 今後、「持続可能な社会」の構築を実現するためには、さまざまな主体(個人・政府・自治体・地域社会・企業・民間等々)が協力しあわなければなりません。本講義では、日本(東洋)においてESDを実践していく上で必要不可欠な環境思想・倫理について、「持続可能な開発」との関係性に焦点を当て、身近な例を取り上げながら受講生と一緒に考えていきます。	94	0
	環境教育・ESD入門Ⅱ	火4	講義は環境問題に関する知識伝達型の講義ではなく、演習形式で行います。環境教育/ESD(持続可能な開発のための教育)関わる国内外の動向を理解すると共に、環境問題について多角的な視点から考察し、環境教育を実践する機会を共有します。受講生は必ずワーキンググループ(WG)に参加し、グループごとに研究活動を行います。WGは①自然②資源・エネルギー③社会(企業)④地域⑤大学⑥ラウン⑦トイレ⑧焼酎⑨温泉の9つを設定予定です。	25	0
日隈 正守 (教育学部)	海が運んだ 中世・近世の鹿児島	木2	我々にとって身近な地域である現鹿児島県域は、南島や琉球王国、中国や東南アジア諸国との間の交易拠点であった。日本国の「南玄関」としての役割を果たしてきた現鹿児島県域における交易の実態と展開過程を学ぶことによって、今後の日本のあるべき国際関係を考察させる。 本講義では、南北朝期以降重要な交易拠点であった坊津、豊臣政権期以降南九州地域における交易拠点として中心的役割を果たした山川の史跡を見学するとともに、坊津を含めた中世南九州地域における日宋・日元・日明関係、山川を中心に戦国期以降の南九州地域における日琉・日明・日清関係や東南アジア諸国との関係について考察していく。	2	6
井倉 洋二 (農学部)	大野ESD自然学校Ⅱ	集中	鹿児島大学と垂水市が共同で設立した「大野ESD自然学校」(垂水市)で実施される自然体験活動や総合学習の受け入れ事業などにボランティアスタッフとして参加し、児童生徒や地域住民との交流体験を通じて、環境教育、ESDを実践的に学ぶ。	11	0
野村 卓 (かごしま ルネッサンス アカデミー)	食料と農の人間教育	火3	食や農に関する知識の習得のみならず、知識の情報発信まで展開できる人材を養成するために、地球の歴史における人類と農耕の姿を外観し、人間の自然性・社会性・身体の関係を読み解いていく。更に現代の社会環境下に対応した青少年の生活スタイルをとおして、人間の成長と食・農のあり方を見定めていく。このとき、講師からの知識のinputをとおしてよりも、ワークショップやグループディスカッション、ディベートの手法を活用しながら、自らの主体性を振り返りながら、個人・家庭・地域のあり方、再生について議論を深めていく。このとき、青年層だけでなく、県下の社会人の聴講をとおして、多世代の意見交換をとおして世代連携も模索していく。	28	2

担当教員 (所属名)	科目名		授業概要	受講数	公開授業
小林 基起 (留学生センター)	アジアの日本語教育	水1	アジアだけでも中国・モンゴル・ベトナム・ラオス・カンボジア・フィリピン・ウズベキスタン・キルギス・インドをはじめ、個別の説明と理解が欠かせない国がある。中南米・東欧・大洋州・中東・アフリカなども、多様性の型を説明するだけでも容易ではない。そこで、実際に各国の日本語教育などの現場を青年海外協力隊の巡回指導や評価等で訪問し、現在も継続的に調査・研究・注視を続けるなかで、最低限理解しておくべきことに絞って説明する。それには多様な国や地域の歴史と文化の現状を学ぶことが前提となる。各々の国や地域の歴史と文化のなかで生きている日本語教育とは何であり、どうせねばならないのかを事例とともに紹介し、その意味と問題点とを整理する。それはアジアをはじめ世界における、日本の役割とすすむべき道とを考えることになる。多様な文化が共存し、平和で豊かな世界にするための理念と方法を考えることにもなる。海外の日本語教育の現場の経験から学ぶべきことを掴んでほしい。みずみずしい感性に期待する。この科目は、将来開設が囑望されている日本語教師養成コースの科目の一つだが、日本語教師志望者のみでなく、広く世界に目を向ける人を対象とする。なお、後期設置の「アジアの日本語教育」科目は、本科目の各論としての位置づけを予定している。	24	0
松野 修 (生涯学習教育センター)	科学教育入門	水2	科学はもともと「人びとの楽しみごと」として、「最高の知的エンターテイメント」として発展してきた。当初は時間や経済にゆとりのある上流階級しか「たのしみごととしての科学」を享受できなかったが、1700年代になると、ヨーロッパの各地で「巡回科学講師」が活躍をはじめた。鹿児島大学生涯学習教育研究センターでは、こうした「たのしみごととしての科学の伝統」を復活させるために、毎年「公開講座 親子孫でたのしい仮説実験講座」を開いている。この講義ではこれらの「親子孫でたのしい仮説実験講座」と連携しつつ、公開講座の内容を学生自身にも体験してもらい、公開講座のアシスタントとしての資質を身につけることを目標としている。とはいえ公開講座への参加・出席を義務つけるものではない。	30	1
小栗 有子 (生涯学習教育センター)	現代社会と環境教育	水2	環境教育はどこから来て、どこへ向かうのか。そもそも環境教育とは何か。これらの問いに応えていくために、講義では、環境教育のルーツ(形成史)を辿りながら、環境教育の成立と発展に深く影響を与えている環境開発問題を取り上げ解説します。環境教育が、教育者の問題関心と各々の教育観・環境観に支えられながら多様な展開をみせるなか、環境教育に固有なまなざしとは何かについて、受講生と一緒に考え、深めていきます。講義は、適宜、環境・開発教育の手法を取り入れながら、講義形式だけでなく、参加体験型の学習法を体験する機会をつくります。	15	0
山田 晋 (非常勤講師)	南北問題と世界の未来	月2	1) グローバリゼーションがアジア、アフリカ、ラテン・アメリカに何をもたらしたか？ 2) 途上国の貧困の原因、現状、解決策を探る。 3) 国連、国際機関、国際NGOの役割、取り組みについて学ぶ。 4) 日本のODA・途上国支援の歴史・現状と課題について 5) 地球市民として国際NGO・ボランティアから学びつつ、自分に何が出来るか、模索する。	238	0
			合計	1,010	35